

平林たい子全集

4

潮出版社

4

平林たい子全集

平林たい子全集 4

昭和52年 2月20日 印刷

昭和52年 3月 5日 発行

著 者・平 林 た い 子

装 幀・伊 藤 憲 治

発行者・島 津 矩 久

発行所・株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋 3-1-3

電話 東京(03)230-0741(販売部)

230-0781(編集部)

郵便番号 102

振替 東京 5-61090

印刷 第一印刷株式会社 製本 株式会社 鈴木製本所

© 1977 Shinko Teshirogi Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします

目次

情熱紀行	7
結婚	83
露のいのち	107
いが栗頭の女	132
肖た男	142
貞女	151
赤と黒	161
インテリの妻	174
お君さんとお光さん	182
萌黄	190

三十歳代	210
春のめざめ	218
女が涙を流す時	261
恋愛結婚	397
空蟬	417
妻の夜	426
エロ小説	438
夢みる唇	447
解説・大原富枝	465

平林たい子全集

情熱紀行

墮胎医

「電車は何分くらいかかるかしら。大丈夫？　嘔気はして
いない？」

駅の階段をのぼっておりと友子は良子の微かに波打っ
ている肩を見ながらささやいた。

自分の声が、二つに裂けて二つの声が別々にしゃべって
いるような変な錯覚はまだつづいていた。そういう言葉を
しゃべる口中の肌が急に唾でふやけてゴムはおずきにでも
さわっているような感じだった。

「嘔気はないけれど、何だか心配なのよ……」

良子は弱い声で答えた。気持が落ちつかないのはもつと
もだ。足もとの磨滅しかかった白線をふみだしながら、良
子とはときどき線路の彼方をのぞいて電車を待ち遠がった。

「良子さん、いま一度、打合わせておきましょう。絶対に
『妊娠』ということとは、口にしないこと……そのことをあ
けすけに言っちゃ、かえって向うの迷惑でもあるんですか

らね……。何だか体の工合が悪くて、月のものがとまって
いますから、治して下さいっていうのよ——。以心伝心で、
向うにはわかってるんだから。……わかってるわね」

「ええ、ただお願いよ。それをあなたがそばから言っ
て——」

「そうね。そりゃ私から言ってもいいわ。——それから、
ぜひあなたに知っていてもいいことは、三ヶ月以内で
は法律上妊娠かどうか判定はできないんだそうですからね。
したがって墮胎ということも成立しないわけでしょう。自
分は墮胎したと思う必要はないのよ」

「まあ、そうなの」

良子は相変らず弱い声で言ったが、手術されるという恐
怖でいっぱい、そのことに興味をもつ余裕さえなさそう
だった。友子は良子の冷淡な顔を見ると、なぜともなくい
ら立って持前の熱情的な口吻でおつかぶせるようにしゃべ
りつづけた。

「とにかく、自分は一寸婦人科が悪いんだという気持を、
自分がまず納得することだわ。そういうふうにしてもちか
けて行けばお医者さんだって気がるだし、後で問題が起き
る気づかいもないんだからね」

「ええ……」

と良子は、あおいほおを動かしてうなずいた。

ガア……と鋼鉄の叫喚みたいな響をあげて長い電車の列
が滑り込んで来た。良子の額で小さい渦を巻いた細い毛が

微かにふるえた。

一つの扉の前に立つて、樽の中の酒のようにごぼごぼ溢れ出てくる客を、良子はほんやり眺めていた。

友子はその憔悴した茶色の目をそつと横からのぞき込んだ。人生のうすいひと皮だけを見ているとばかり思つて来た良子の眼ざしが、急に深い淵のような複雑な光をたたえているように見える。

——ああ、この目が、まだ自分の見たことのないいろいろなものを見ているのだ——

と、友子は思う。

明るい横陽が、バツとうしろのベンキ塗りの立看板にあたつていたが、電車内の客はもう何となく黒ずんで見えるような午後三時すぎだった。

山の手にこの頃木造ででき上つたある駅に二人は降りた。どこかでモーター杭打機（いかりうちき）の音がせわしくひびいて「WAY・OUT」とした方向板前のコンクリート床が模様がえるために大きく掘りかえされていた。

「気分は悪くない？」

「大丈夫……」

友子の神経は必要以上に絶えず小ぜわしく良子のまわりからみついていた。自分で自分をいやになりながら、友子はこの問題を打明けられて以来そうしないではいられない。親切どころか、全く正反對の残忍な気持がしきりに咬られて、良子の心の中にふみ込んで行かずには自分の気持

がいたたまらないのだった。

同じアパートの年増ダンサーの石田百合子がかいてくれた地図を、二人は改札口を出てからひろげた。もどめる医院はじきに見つかった。焼跡を片づけた木材の新しい街の角の青いベンキぬりのだだっ広い平家だった。二人は何となく躊躇してどちらともなく立ちどまった。

そのとき、扉が中から荒つぽくあいて、黒てんの外套に黒エナメルのハンドバッグをかかえた中年女が目の前に現れた。一寸目立つ顔だちのその女は傲岸とも見える目つきでじろりと二人を見てからコソコソと歩道に行つた。物事に感動しないたちの良子も、場合が場合だけにぎょつとして女を凝視した。

「あれはあなたのお仲間じゃないらしいな。正真正銘の婦人科の顔色だもの」

友子はこともなげに言つたが、いまの女の複雑な風貌が、この建物の中で営まれる秘密の手ざわりのように思えた。そして、急にひとことの無責任さで心の勇むのを覚えた。

二人は、受付の窓口に立った。

三十五六かと見える看護婦が、ものなれた無愛想さで診察券の新しいカードをそばから一枚とつて、

「お所とお名前をおっしゃって下さい」

と、ペンをもって待っている。

「——ちょっと……」

と、友子は大いそぎで良子の外套のひじを引っぱった。

そして良子の言おうとすることばを奪いとって、口から流れ出すままに出たらめの住所を言った。

「渋谷区千駄ヶ谷四丁目六百五十番地山崎テルですの」

千駄ヶ谷に四丁目という所があるかどうかの懸念が、ちらりと針のように友子の頭の中に閃いた。しかし、持前の大胆さで彼女は押し切った。

「かまうもんか——」

友子は看護婦が書き込んだ診察券を受けとって、廊下に置いた腰かけの方に歩いて行つた。看護婦は、どちらが患者なのかわからない目つきで二人を見くらべた。

診察室の扉はあきかかつていた。一人の上品な娘が美しい花模様のちりめん羽織のたもとを踵でも入っているようにたたりとたたりして、注射してもらっている所だった。

真白なねりま大根みたいな上膊に、青ガラスの二CCばかりの注射器がぶすりとささって静かに静かに注射液が注ぎ込まれていた。

「この薬は痛いからね、静かにさしてあげますよ」

娘の前の廻転椅子にかけた四十いくつぐらいの白衣の髭男がぶつりと言った。娘は痛みに堪えているのだから、片手でめくり上げた袖を押さえたまま下を向いて、白い糸切歯をくいしばっているのが見える。

友子はダンサーの石田百合子にきいて来た院長山本博士は、これだなどすぐ思った。彼女は扉の中に入って行って診察券をそばの卓の上にさし出した。博士は娘の方を見て、

「あなたお一人？ つきそいはないんですか。そいつは、一寸こまつたな……」

「大丈夫だと思えますわ」

博士は娘が着物をきる動作を見るともなく見ながら、首をひねるふうだった。キュッキュッと衣ずれの音をたてて帯をしめ終った娘はスリッパをひきずりながら、よろめくように廊下に出て腰かけの上にくず折れた。

「次は山崎さん……」

博士が診察券を見ながら呼ぶ。二人はうつかりしてその偽の名をきき流そうとしたが、はっと気づいた友子が良子を出したので良子は反射的に立上った。

「あなたも一緒に来てよ」

「わかつているからさ、ちゃんとするのよ——」

そのとき扉口まで出て来た博士は、腰かけにもたれている娘に向つて、

「早くお帰りになつた方がいいですよ。めつたにそんなことはいないと思いますがね、もしか途中でひょっとお腹でも痛くなつたら大変ですからね——」

娘は目をつぶっている。

博士はもとの廻転椅子にかえて、良子と向い合つた。

博士は新しいカルテに何か書き込みながら、

「お名前は？」

「あのう……」

と、言つたとき、良子はさっきの偽名を忘れて詰つてし

まった。

「あら、ほんとうに失礼いたしました。じつは、受付で偽名を言ったもんですから忘れてしまったんですわ」

友子はそばに立ったままぬけぬけした調子で口をそえた。こういう相手を食べた告白もいまの場合まんざら相手の悪感情を誘うものではないのだという常識が、友子にはちゃんとそなわっていた。

——このお医者さんだつて偽名を言つてもらつた方がいいはずだわ。もしか調べられでもしたとき、その住所にたずねて行かれてもその人がいなければかえつて好都合だもの——

友子はすでに共犯者のなれなれしい氣持だった。しかし偽名だと言つた以上、形をととのえるために、別な名前を言わなければならない。

「市川やす代と申します。私のいとこでございます」

という言葉がすらすらと友子の唇から出た。医者はいやいやとペンをはしらせてからどこが悪いのかを、まずたずねた。

「あのう……」

良子はちらと友子を見て、さつき友子に言い含められたとおりのことを吃り吃り自分で言つた。友子の注意はその告白をきく博士の表情に突き刺さつてゐた。が良子の言分をドイツ語のきまりきつた医術語に頭で訳し直しているらしい彼の顔では險も髭も壁にはりつけた標本の昆虫のよう

にびたりと静止してゐた。

友子が期待してゐたような特別な陰影も光も現れはしないのだった。

友子は、そういう博士の無表情の裏に、千枚ばかりの厚さではりついている無数のこれと同じ経験に、まざまざと自分の手で触れてゐるような氣持だった。

簡単な診察をすまずと、博士は頭の上の電氣時計を見上げて、

「それじゃ、明日の一時頃来てください。搔爬しますからね。——それから、そのとき搔爬料を五千元もつてきてください。お忘れなく」

その「五千元」という言葉をきくと、急に躓いたような表情で、良子は友子を見た。友子は良子の憐れっぽい視線をなぞふり払うように、

「は、五千元でございますね。承知しました」

良子が洋服をととのえるのを待つて、二人は廊下に出た。さつきの娘がもたれかかつてゐた場所に、宿屋の女中といつた三十女が腰かけて、巻きの固そうな高級たばこをぼかりばかりと喫つてゐた。

医院を出てからの一二分を良子はだまつてずんずん歩いた。彼女は急にふりかえつて、友子を待ちながら、

「困つた。五千元——とても問題になりやしないわ。延期するはか仕方ないわね」

「延期なんぞできやしないわ。そんなことをしていたら、

三ヶ月を超えるじゃないの。良子さん、私にはちゃんとい
い考えがあるのよ。任せておきなさいよ」

「だって五千円よ。友子さん」

「五千円だって、一万円だって、驚きやしないわ」

「驚かないたって、あしたいるのよ」

「あなたも何て融通のきかないお嬢さんだろうね。だから
こんな目にあうのよ。——私の考えを言おうか。あした一
時に行つて金があるような顔をして黙つて搔爬させちゃう
のよ。そして終つてから、まことにすみませんが、今日は
二千円きり持つてきませんでした、いずれ近日持つてあ
がりますというのよ。終つちゃえばいやといつたつてちつ
ともかまやしないじゃないの」

「まさか、そんなことできないわ」

「じゃ、どうするのよ」

と、言い返されると、良子の気持は完全にねじ伏せられ
ていた。

「あなたつてとても傑い人ね。私だんだんわかつてきた
わ」

良子は妙にすたすたと早足しながら口走つた。彼女の気
持の中で、感謝をとつくとおり越した畏怖や嫌悪が、茸
みたいによきによき生えているのが友子にはよくわか
る。

「ふふ、傑いんじゃないわ。だけど、奇妙な持前をもつて
いる人間ではあるらしいわねえ。とにかく男に愛される性

質じゃないわ」

友子は嘲るように言返した。何かさびしい気持が隙間風
のように心の中に吹きこんでいた。

東中野の二人のアパートの洗面所で良子と友子とは、ほ
ぼ同じ度数だけ猪狩と顔を合わせたはずだった。友子が出
逢うときには、彼はいつも歯ブラシをくわえたまま、くる
りと彼女に背を向けて細い柱鏡に見入っているふりをした。
「へへっ」

と、友子は鼻でわらつて、その細い柱鏡の中で動いてい
るうしろの窓外の風景を見ているふりをした。ふと、鏡の
中で猪狩の目が自分をぬすみ見ていることもたまにはある。
そんなとき二十五になりながら、友子は十六七の娘のよう
にどきんとした。

友子には、小説や芝居で女が男にむずかしい選択をする
気持がわかつているようにでいてわかつていなかった。どん
な男でも、何かでそばにあることがあると、友子の気持は
その男の磁気に感電したようにどきんと取り乱れた。

そうして、一時間も男と話しこむと相手が美しかろうと醜
かろうと、彼女は何ともいえずうっとり魅せられた。そ
の日半日か一日ぐらいいは、その男の印象をとりとめもなく
反芻するのだった。

友子は、男気のない電話交換所にもう五年もつとめてい
た。主事補を象徴する紫紐の肩章には、荒寥とした曠野の
ような五年間の青春が束ねてあつた。

いつも電池の薬品が匂っている、細く長い交換手の声がかんわんしている室を訪れる男性は、ある一人の技師だけだった。

友子は、主事補を拝命するにつれて、彼から電気について一般的な講義を一週間、同僚五名と一緒に聞いたことがある。そのときにも、友子はその技師がたまらなく好きになった。悶々として熱さだして寝た。一人で自炊の乾いたパンをかじりながら、自分の机の上にぼろぼろと流した涙をどうして相手は知っているよう。

あの不良と札つきの猪狩だって、もしも向うが真直ぐに進んできたら、右によける心の自由も左によける心の自由も、友子にありはしなかったのだ。

しかし、あの技師がそうであったように、札つきの猪狩さえも、友子の内に溢れている青春を見落してとおりすぎた。世のすべての娘が花なら、友子のような存在はその花の彩りをいやが上に引き立たせる役割りをもった葉なのかも知れない。

じつさい、友子という存在を暗い背景としたからこそ、良子の若さと美しさとは、ばつと射したような誇張の光芒で男の目を射たのだ。

これというとりとめた人生観もなく、内に刻んだ深い情緒もなく、ただ、

「私、お汁粉がたべられて、ときどき映画がみられれば何も文句はないのよ」

と、風のように生きている良子が、アパートでは女の神秘を体現しているモナリザのような女に思われていた。

階下に住んでいる管理人の親戚の大学生がフランス語で良子にラブレターを送ってよこしたのなぞは、友子には全く笑止でさえあった。通信教授で、三年ごしフランス語を勉強した友子が、ゾラの「風車小屋の嵐」を窓ぶちにおいたのを見て、てっきり良子の読む本と思っただけのだった。ところで、じつは良子は女学校は三年まで行っていたのだった。いながら、自分の名前をローマ字でかくこともできなかった。

「みんな、勤労働員のおかげさ」

と、友子はよく何かのとき、そういう良子をこちらから説明してやった。

「ふふん」

と、答えるだけで、そのことについて何かの感慨がありそうでもない。良子は小さい百貨店につとめていたが、流行歌を上手にうたって煙草をのみ習い、化粧だけは一寸上手だが、寝ころんでカストリ雑誌を読みながらぼりぼり南京豆をたべて、じきにうたた寝をしてしまう。

友子は、目に触れる男の噂を思わずしてしまうくせを内心ひどく恥じていたが、良子にはそんなことは絶対にない。「あなた、あの人をどう思う？ ちったあばつとした恋愛でもしておくれよ」

と、友子はいらいらして言うことがある。

「悪くないね」

というだけで、高峰三枝子ばりの低音の鼻唄をうたっている。

その良子が、つい二三回洗面所で不良の猪狩と親しうに冗口をきいているのを見かけたと思ったら、もう妊娠していた。

良子にそのことを打明けられたときの衝撃を、友子は一生涯わすれないだろう。

「私はあの男に捨てられた」端的に言えばまず、そう言っただような感慨が友子の胸をついた。もっとも友子は散歩などで出逢う幸福そうな男女を見かけるたび、何だかその男に捨てられたような妙な怨恨を含んでその男を見直すことがあったのだ。

気がついてみると、当の良子よりも友子のほうが何倍か懊悩していた。

「ねえ、どうするのよ。結局、あいつと一緒になるつもり？ 今のままにしておけば、そうなるわね」

「いやよ。そんな気は毛頭ないわ。それにもうこのアパートにはいないらしいのよ。私が妊娠したとわかったから、逃げちゃったのよ」

「へへえ！ そういう奴なんだ」

友子は、自分のうらみに良子のうらみを重ねた憤りの手榴弾を、見えない猪狩に向って思うさまの力で投げつけた。そうしてその日から、友子は良子の肩がわりをして、ぐん

と自分の両肩に背負いこんだ。

世間知ららしい年増ダンサーの石田百合子にわけを話して、その方面の医者を教えてもらったのも友子の才覚だった。二千元の金を勤務さきの同僚から借りてきたのも友子だった。友子は自分がこの事件にしつこく立ち入って事を運んで行こうとする熱情に、自分ながら呆れていた。

「まるで、私が妊娠してるみたい……」

友子は、自分の渦を巻いている気持を思わず自分で笑い出した。

「ほんとね——」

その友子と一緒に、はははと浅く笑っている良子も、良子であった。——

良子と友子とは、その医院から何町もない省線駅に歩いて行つた。すると駅の切符を買う列のかげに、派手なシルのコートを着て毛皮の襟巻をまいた女が不自然な恰好でかがんでいるのを認めた。

「友子さん、さっきの娘さんよ」

と、良子がささやいた。

「あら、ほんとだ。——」

友子は早速持前の気性で、ずかずかとそばによつて行つた。

「ねえ、どう遊ばしたの。お腹がいたいんじゃない？」

「あら！」

と、娘はちぢまって行こうとする肩をあげて二人を見たが、また自分の苦痛にもどって、うつろな目を泥だらけな床に投げている。

「さ、とにかく、お立ちになってごらんさい。お宅まで、お送りしてあげましょう。どちらですか」

「宅は八王子ですけど、今日はかえりたくないんですの」という間にも、娘はやわらかい衣類の上から、腹をおさえるようにもがいた。

「私、きつと、流産するんですわ。そういう薬を注射してもらったんですから——こまりましたわ。こんな所で」

「流産——」

と、友子は反復して一寸考えこんだ。

訪れた人

「どこか宿屋につれていっていただければ、あとは何とか自分で始末しますから」

と、辞退する娘をむりやりに友子と良子は自分たちのアパートに介抱しながらつれかえった。

娘は一時間もたたないうちに流産した。

「御心配にならなくなつて結構よ。ここは私たち二人つきりで、めったに人もたずねて来やしないし、私はどうせこ

こ二三日つとめを休むことにしていた所ですからね——」

友子は、脱ぎ乱れたままの娘の派手な着物を衣紋掛にかけたり、袋帯をくるくる巻いたりしてから、娘の枕元に坐った。

「お医者さんのことなんですけれどねえ。いま向うの室の私の友達に相談して来たんですけど、やっぱり呼んで一応診てもらって置かないとあとがこわいって言うのよ」

「でも、それは——」

「大丈夫なんですって——。診たところでは、絶対に流産の原因はわかりやしないから、原因をきかれたら、どういう原因だか心あたりがないって言えばそれつきりなものなんですって……」

「……………」

娘はまだ腹痛がのこっているのかセルロイドのようにうすい臉をとじて、ときどき苦痛をやりすごした。手製のリリヤーンをかけた電燈の光が、格別な神秘さもなくその顔を真上から照らしている。

「じゃあ、そういうことにしましょうね。すぐ良子さんにお医者さんへ電話をかけさせるわ」

友子はそう言ったまま、すぐには立ち上らず、サージのスカートの膝について娘の顔をのぞき込んだ。

「あ、そう、そう。その前にお名前をうかがわなくっちゃ——。それから、どなたかにそつと来ていただきたい方でもあるなら、お呼びになつてちつともかまわないのよ。電